

は安い、価値のあるものだ」

なおこの研修申し込みは、川越農業改良普

及所を通してあり、同所の酒井ミツさんに、いろいろお世話になった。

ポテトジョーク アラカルト

◎消費

ふとった経済学者が、教職員専用の食堂で食事をしていた。彼が2つ目のパイに手をのばすのを見ていたダイエットの専門家が、その愚行の理由を教授に説いて聞かせようとした。そこで経済学者は反論した。

「あなたも御存知と思いますが、平均的アメリカ人は生涯に鶏卵3万個を食べ、パンを6千本、ジャガイモを9千ポンド、牛肉を8千ポンド、羊を15頭、豚を17頭、仔牛を6頭、砂糖数百ポンド消費します。パイをひと切れ余計に食べたからどうだって言うんです？」

◎なぜぞ

ゴルバチョフの時代も、エリツィンの時代も、ずっとモスクワで流行っているなぜぞ。

「長さが百五十メートルあって、普段はジャガイモを食べているものは何でしょうか？」

「肉を買うのにできるモスクワの行列」

◎高級料理店

ある高級レストランの気取ったウエイターが「わたくしどものステーキをどう御覧になりましたか？」と食事を終えた客にたずねた。「確かに見ましたよ」と客は言った。「ジャガイモの陰にあったけど」

◎自分で

「どう、あなた。このポテト・サラダ」と新妻が夫にたずねた。

「おいしいよ、とっても。これ、君、自分で買ってきたの？」

◎ジャガイモは大切な食糧

ドイツの農民指導者ヴァルター・ダレ(1933年ヒットラー肉閣の食糧相)が、ある村の鶏小屋を抜打ち的に調査した。

「鶏にどんな餌をやっとるか」

とダレは最初の農民に質問した。

「もちろん、良い卵を生むように穀物をやっています」

「それは食糧の浪費だ」

その農民は逮捕された。

第2の農民にも、同じ質問をした。

「ジャガイモを与えております」

「それは、貴重な国民食糧の許し難い浪費だ」その農民は罰金刑にされた。

3番目の農民は、同じ質問にこう答えた。

「ああ、あっしですか。私は毎朝鶏小屋に1マルクはうりこんで、『自分で餌を買え』って言ってやります」

◎ジャガイモの生産と消費

資本主義体制下では、生産には厳格な規格があり、消費はめちゃくちゃに混乱している。共産主義体制下では、消費には厳格な規律があり、生産はめちゃくちゃに混乱している。

◎江戸小話

「芋屋の娘、歳をとったね」

「ああ、ふけた」

◎譲り合い

あるレストランで二人の子供がベークド・ポテトを注文した。やがて料理が目の前にきたが、大きさに大差があった。めずらしく、「お前、先にとって」「いや、君が先にとっていいよ」と先を譲りあった。5分ほど譲り合っていたが、一人が「それなら、こっちを食べるよ」と大きいほうを取ってしまった。もう一人は仕方なく小さな芋をとったが、「もし僕が先取るなら、絶対小さなのを取ったのに」

と悔しそうに言った。

そこで、大きいほうをとった子が、素知らぬ顔でつぶやきました。

「先を取っても、後を取っても、君は小さいものになるのだから結果は同じことだよ」

◎ジャンボ・ポテト

ある町のジャガイモ祭りの話。

適当なサイズのいもが展示され、説明には『日本一のジャンボ・ポテト』とあった。

町の人「それほど大きくないじゃないの」

農民「ジャンボ・ポテトの肥大途中のときのものでして」 (浅間 和夫)